

近畿自動車道尾鷲多気線（紀伊長島～紀勢大内山間）埋蔵文化財発掘調査報告

## 流 谷 遺 跡

2009（平成21）年3月

三重県埋蔵文化財センター



巻頭図版 1 流谷遺跡周辺の状況



遺跡周辺状況（上空から）  
※中日本高速道路株式会社提供



調査地から望む大内山川（南から）



巻頭図版 2　流谷遺跡調査後状況・大西鎮守の石組み



流谷遺跡石組み調査後状況（西から）



流谷遺跡石組み右袖（北から）



流谷遺跡石組み奥壁（北から）



大西鎮守の石組み①



大西鎮守の石組み②



## 序

大紀町の大内山地区では、現在、近畿自動車道尾鷲多気線の建設事業が進められております。この高速道路ができることは、地域の活性化や生活における利便性の向上を図る上で重要なことと思われます。

その一方で、この事業に伴う工事によって、遺跡として埋もれている先人たちの暮らしの痕跡が消えていくことも避けられません。今回、本書で発掘調査の報告を行う運びとなった遺跡も、こうした失われゆく遺跡のうちのいくつかです。遺跡が失われていくのは残念なことですが、発掘調査を行い、記録を残せたことは幸いといえるでしょう。この発掘調査によって得られた地域の歴史に関する手がかりが、今後活用されていくことを切に願っております。

最後になりましたが、調査にあたって多大なるご理解とご協力をいただきました地元の方々をはじめ、中日本高速道路株式会社名古屋支社松阪工事事務所、大紀町教育委員会の方々に厚く御礼申し上げます。

2009（平成21）年3月

三重県埋蔵文化財センター  
所長 吉水康夫

## 例　　言

1 本書は、三重県教育委員会が中日本高速道路株式会社から委託を受けて実施した、近畿自動車道尾鷲多気線（紀伊長島～紀勢大内山間）建設予定地内に所在する埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2 調査にかかる費用は、中日本高速道路株式会社の負担による。

3 埋蔵文化財発掘調査等の実施年度・遺跡名・面積・所在地及び発掘調査体制については下記のとおりである。

平成18年度

現地調査：流谷遺跡 三重県度会郡大紀町大内山 本調査60m<sup>2</sup>

調査主体：三重県教育委員会

調査担当：三重県埋蔵文化財センター 調査研究II課

　　課長 田村陽一 主査 木野本和之

調査協力：中日本高速道路株式会社名古屋支社松阪工事事務所・大紀町教育委員会

調査作業受託：（株）イビック

平成19年度

現地調査：井良野新田遺跡 三重県度会郡大紀町大内山 範囲確認調査304m<sup>2</sup>

　　西ノ前遺跡 三重県度会郡大紀町大内山 範囲確認調査132m<sup>2</sup>

　　川口垣内遺跡 三重県度会郡大紀町大内山 範囲確認調査1,050m<sup>2</sup>

調査主体：三重県教育委員会

調査担当：三重県埋蔵文化財センター 調査研究II課

　　課長 田村陽一 主幹 木野本和之 技師 伊藤文彦

調査協力：中日本高速道路株式会社名古屋支社松阪工事事務所・大紀町教育委員会

調査作業受託（井良野新田遺跡・西ノ前遺跡）：中桐建設（株）

平成20年度

現地調査：川口垣内遺跡 三重県度会郡大紀町大内山 範囲確認調査208m<sup>2</sup>

調査主体：三重県教育委員会

調査担当：三重県埋蔵文化財センター 調査研究II課

　　課長 田村陽一 主査 船越重伸 技師 石井智大

調査協力：中日本高速道路株式会社名古屋支社松阪工事事務所・大紀町教育委員会

調査作業受託：中桐建設（株）

4 本書の作成業務は三重県埋蔵文化財センター調査研究II課・情報普及課・支援研究課が担当し、平成19・20年度に実施した。なお、執筆担当者名は文末及び目次に明記した。

5 現地確認及び発掘調査で確認された遺物及び発掘調査記録類については、三重県埋蔵文化財センターで管理・保管している。

6 本書に用いた地図及び遺構実測図は、世界測地系の座標を基準としている。なお、この地域の磁北は6度40分西偏する（平成20年現在）。

7 本書に掲載した遺物実測図は実物の4分の1を基本としたが、資料の性格によって変更したものもある。

## 本文目次

|     |                         |    |
|-----|-------------------------|----|
| I   | 前言（木野本）                 | 1  |
| II  | 大紀町大内山地区的地理的・歴史的環境（木野本） | 4  |
| III | 流谷遺跡（木野本・石井）            | 5  |
| IV  | 範囲確認調査                  | 9  |
| 1   | 井良野新田遺跡（木野本）            | 9  |
| 2   | 西ノ前遺跡（木野本）              | 10 |
| 3   | 川口垣内遺跡（木野本・伊藤・石井）       | 10 |
| V   | 結語（石井）                  | 13 |

## 挿図目次

|     |  |    |
|-----|--|----|
| 第1図 | 近畿自動車道尾鷲多気線（紀伊長島～紀勢大内山間）関連遺跡位置図（1:100,000） | 2  |
| 第2図 | 大内山地区内の遺跡分布図（1:50,000）                     | 3  |
| 第3図 | 流谷遺跡調査区位置図（1:2,000）                        | 5  |
| 第4図 | 石組み構造平面図・立面図・断面図（1:50）                     | 6  |
| 第5図 | 流谷遺跡出土遺物実測図・拓影（1:4、1:2）                    | 7  |
| 第6図 | 井良野新田遺跡調査区位置図（1:5,000）                     | 9  |
| 第7図 | 井良野新田遺跡出土遺物実測図（1:4、1:1）                    | 10 |
| 第8図 | 西ノ前遺跡・川口垣内遺跡調査区位置図（1:5,000）                | 11 |
| 第9図 | 川口垣内遺跡出土遺物実測図（1:4）                         | 12 |

## 表目次

|     |                                |    |
|-----|--------------------------------|----|
| 第1表 | 近畿自動車道尾鷲多気線（紀伊長島～紀勢大内山間）関連遺跡一覧 | 3  |
| 第2表 | 大内山地区内に所在する遺跡一覧                | 4  |
| 第3表 | 出土遺物一覧表                        | 15 |

## 写真図版目次

|       |                    |    |
|-------|--------------------|----|
| 卷頭図版1 | 流谷遺跡周辺の状況          |    |
| 卷頭図版2 | 流谷遺跡調査後状況・大西鎮守の石組み |    |
| 写真図版1 | 流谷遺跡調査前状況・作業風景     | 18 |
| 写真図版2 | 井良野新田遺跡            | 19 |
| 写真図版3 | 西ノ前遺跡              | 20 |
| 写真図版4 | 川口垣内遺跡             | 21 |
| 写真図版5 | 流谷遺跡・井良野新田遺跡出土遺物   | 22 |
| 写真図版6 | 川口垣内遺跡出土遺物         | 23 |

# I 前 言

## 1 調査に至る経過

近畿自動車道尾鷲多気線は、尾鷲市から多気郡多気町までの延長約54kmの高速道路で、多気郡多気町の勢和多気JCTで近畿自動車道伊勢線（伊勢自動車道）と接続することで、東紀州地域と近畿・中京の二大経済圏を結ぶ幹線道路として周辺地域の利便性向上を目的として計画された。

### （1）紀勢大内山IC～勢和多気JCT間の発掘調査

事業は平成3年3月に度会郡大紀町・多気郡大台町・多気町の3町にまたがる紀勢大内山IC～勢和多気JCT間（延長約24km）が整備計画決定された。その後、平成5年11月には施行命令が出された。

当該区間建設に係る埋蔵文化財保護協議は、三重県埋蔵文化財センター（以下当センター）調査第二課（当時）が担当した。平成7・9年に分布調査を実施し、事業地内の19遺跡（56,850m<sup>2</sup>）を協議対象として日本道路公団名古屋建設局（当時）に提示した。これをもとに具体的な協議が進められ、平成10年度から現地発掘調査に着手することとなった。

これ以後に実施された範囲確認調査の結果、発掘調査が必要と判断された遺跡は、東前遺跡・勢和村水銀探査抗跡群の2遺跡と、平成12年度に新たに発見された栗生城跡の3遺跡となり、平成11年度に勢和村水銀探査抗跡群、平成13年度に東前遺跡・栗生城跡の発掘調査を実施し、平成15年度の報告書刊行で当該路線に係る埋蔵文化財発掘調査は完了した。

### （2）尾鷲北IC～紀勢大内山IC間の発掘調査

当該区間（延長約30km）については、平成8年12月に整備計画決定され、平成10年12月に施行命令が出された。埋蔵文化財保護協議は、当センター企画調整グループ（当時）が担当。平成17年1月18日付で、日本道路公団中部支社（当時）松阪工事事務所長から三重県教育委員会教育長宛に当該路線建設事業に係る埋蔵文化財分布調査依頼が提出された。平成17年1月31日付で当センターから該当市町（尾鷲市、北牟婁郡海山町・紀伊長島町（合併により現在は紀北町）、度会郡大紀町）教育委員会に対し当該路線建設事業地内における埋蔵文化財の有無確認に

係る照会を実施した。それを受け、該当市町教育委員会が分布調査を実施した結果、事業地内に17遺跡（29,310m<sup>2</sup>）が所在することが判明。当センターは該当市町教育委員会からの報告とともに分布調査報告書を作成し、平成17年5月に事業者側に提出した。

その後、日本道路公団民営化により当該路線のうち尾鷲北IC～紀伊長島IC間は国土交通省が建設を担当する『新直轄』区間に変更され、調査対象遺跡は15遺跡（17,560m<sup>2</sup>）となった。協議の結果、平成18年度から調査研究II課が担当し、現地調査に着手することとなった。なお、二郷神社遺跡については紀伊長島ICアクセス道路建設事業担当が三重県県土整備部となつたため、協議の対象から外れることになった。また、井良野新田遺跡及び川口垣内遺跡については、それぞれ1遺跡の扱いとした。したがつて、該当路線に係る調査対象遺跡は4遺跡（17,560m<sup>2</sup>）となった。

## 2 発掘調査経過

### （1）平成18年度

用地買収遅延により予定していた調査の大半は実施を見送らざるを得ず、発掘調査を実施できたのは流谷遺跡1遺跡であった。

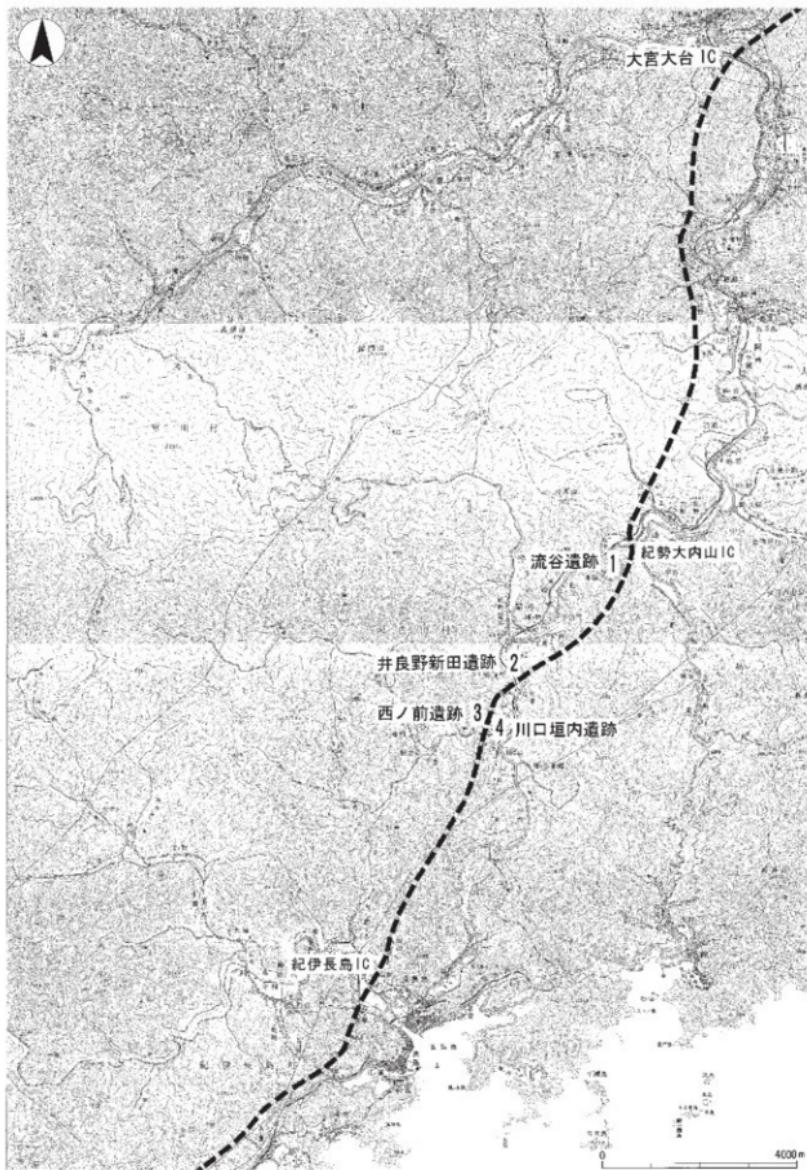
### （2）平成19年度

用地買収遅延により、年度後半に井良野新田遺跡（分布調査時はA～Fの6遺跡に分割）・西ノ前遺跡・川口垣内遺跡（分布調査時はA～Eの5遺跡に分割）の範囲確認調査を実施したが、井良野新田・西ノ前の2遺跡は以後の調査は必要なしと判断し、その旨を事業者側に報告した。この結果、調査対象遺跡は川口垣内遺跡に絞られた。

### （3）平成20年度

前年度に引き続き、川口垣内遺跡の範囲確認調査を実施した。前年度に調査が及ばなかった南側の地区を中心に調査を行ったが、調査の結果、本調査の必要はないと判断されたため、その旨を事業者側に報告し、調査を終了した。

（木野本）

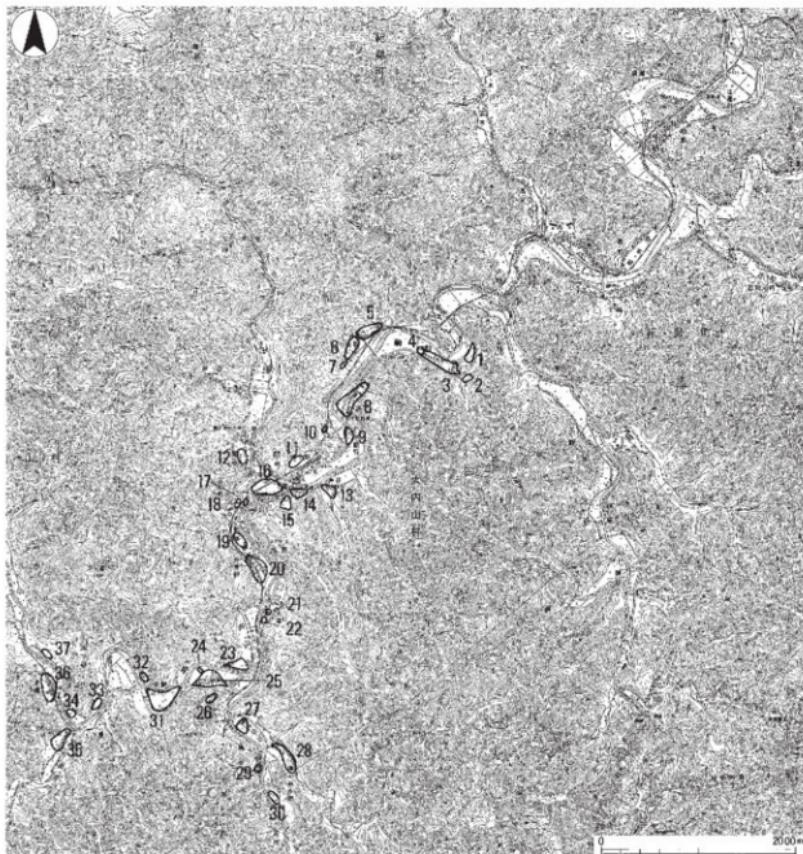


第1図 近畿自動車道尾鷲多気線（紀伊長島～紀勢大内山間）関連遺跡位置図（1：100,000）

| No. | 遺跡名     | 所在地            | 事業地内面積<br>(m <sup>2</sup> ) | 性 格   | 時 期   |
|-----|---------|----------------|-----------------------------|-------|-------|
| 1   | 流谷遺跡    | 度会郡大紀町大内山流谷    | 60                          | 石組み遺構 | 近世    |
| 2   | 井良野新田遺跡 | 度会郡大紀町大内山井良野新田 | 3,910                       | 散布地   | 中世・近世 |
| 3   | 西ノ前遺跡   | 度会郡大紀町大内山西ノ前   | 1,160                       | 散布地   | 中世・近世 |
| 4   | 川口垣内遺跡  | 度会郡大紀町大内山川口垣内  | 12,430                      | 散布地   | 中世・近世 |
|     | 4 遺跡    |                | 17,560                      |       |       |

第1表 近畿自動車道尾鷲多気線（紀伊長島～紀勢大内山間）関連遺跡一覧

※No.は第1図に対応する



第2図 大内山地区内の遺跡分布図 (1 : 50,000)

## II 大紀町大内山地区の地理的・歴史的環境

近畿自動車道尾鷲多気線は、尾鷲市・北牟婁郡紀北町・度会郡大紀町・多気郡大台町・多気町の5市町を通過する。本来ならば、5市町すべての位置的・歴史的環境について概観すべきであるが、ここでは発掘調査が実施された大紀町大内山地区に限定して記述することとする。

### 1 地理的環境

度会郡大紀町は、平成17年2月14日、大宮町・紀勢町・大内山村の2町1村の合併によって誕生した自治体である。三重県の中南部に位置し、東は度会郡度会町、西・北は多気郡多気町、南は度会郡南伊勢町・北牟婁郡紀北町に接するとともに旧紀勢町は熊野灘に面する。東西約25km・南北約20km・面積約233km<sup>2</sup>の町域の9割以上を山林が占める。そのため地形は急峻で、集落・耕地は町城を流れる宮川とその支流である大内山川・藤川沿いに開けた僅かな平地・熊野灘沿岸部に集中する典型的な農山漁村地域である。

### 2 歴史的環境

これまでに知られていた大内山地区内の埋蔵文化財については、岡ヶ野遺跡で表採された弥生時代中期に属する壺形土器の破片、頭ノ宮四方神社付近で発見されたとされる鎌倉時代に属する和鏡2面、地区内唯一の中世城館である大内山城（中野城）跡の3件で、その実態に不明な点が多くあった。しかし、『大内山村史』編纂事業の一環として行われた、平成14年から約2年にわたる埋蔵文化財分布調査によって、地域の遺跡分布状況及びその歴史を解明する上で重要な手がかりを多数得ることができた。

『大内山村史』によると、大内山川の流れが大きくなびく蛇行する部分の平坦地に遺物が多く散布し、遺跡の多くが現在の集落と重複する場所に立地するという共通点が見いだせるという。また、表採した遺物は縄文時代から近世までの幅広い時期のものであったが、その大半が室町時代後半から江戸時代初頭の範疇におさまり、特に「垣内」地名が見られる所に当該時期の遺物散布が濃密であることから、大内山地区の本格的な開発は中世に始まったことを裏付ける。なお、大内山川沿いには、世界遺産に指定された巡礼道である熊野街道伊勢路が通過していたとされるが、その実態は不明な点も多い。今回の分布調査で得られた前述の成果や、今後の調査に進展により更に具体的な成果をあげることが期待できよう。

また、分布調査で最も多く遺物が採集されたのが松原沖遺跡で、遺物の大半が弥生時代に属する土器片と石器類であることから、ここが大内山地区を代表する遺跡であり、今後も保存活用していくべき遺跡であると指摘されている。

埋蔵文化財にとって幸いにも、大内山地区では大規模な開発行為がこれまで実施されていないため、地下に地域の歴史を解明する上で重要な資料が良好な状態で残されている可能性が高い。地域の宝である埋蔵文化財を将来にわたって護り伝えていくためにも、積極的な保護措置が講じられることが期待される。

（木野本）

|              |            |           |           |            |
|--------------|------------|-----------|-----------|------------|
| 1 中瀬沖遺跡      | 2 流谷遺跡     | 3 本デ沖遺跡   | 4 新デ沖遺跡   | 5 脱ヶ瀬沖遺跡   |
| 6 庚申立道沖遺跡    | 7 大西海岸遺跡   | 8 松原沖遺跡   | 9 中切遺跡    | 10 葛籠谷遺跡   |
| 11 岡ヶ野遺跡     | 12 脇谷遺跡    | 13 芦谷口遺跡  | 14 江尻遺跡   | 15 寺裏遺跡    |
| 16 下り・垣外遺跡   | 17 西ノ野A遺跡  | 18 西ノ野B遺跡 | 19 井良野沖遺跡 | 20 井良野新田遺跡 |
| 21 真谷口遺跡     | 22 廉街道遺跡   | 23 三軒屋遺跡  | 24 西ノ前遺跡  | 25 川口垣内遺跡  |
| 26 大内山（中野）城跡 | 27 梅ヶ谷沖遺跡  | 28 本郷垣内遺跡 | 29 古座谷口遺跡 | 30 安間谷口遺跡  |
| 31 中野垣内A遺跡   | 32 中野垣内B遺跡 | 33 柳本沖遺跡  | 34 門口沖遺跡  | 35 柳古遺跡    |
| 36 本郷遺跡      | 37 向井遺跡    |           |           |            |

第2表 大内山地区内に所在する遺跡一覧

※No.は第2図に対応する

### III 流谷遺跡

#### 1 立地と状況

流谷遺跡は、度会郡大紀町大内山字牛脇に所在する。調査地は本駒集落南東の山裾に位置し、すぐ北側は大内山川が大きく蛇行する。大西鎮守と呼ばれる小さな神社から、少し斜面を登った所に平坦地の一部が今回の調査対象地で、調査面積は60m<sup>2</sup>である。

#### 2 調査結果

##### (1) 確認された遺構

調査対象としたのは、前述平坦地の南東隅、背後にそびえる山地から北東方向に延びる尾根の基部で確認された石組みである。この石組みの周辺も含め精査したが、遺構と判断できるものは他に確認することはできなかった。

以下、発掘調査で得ることのできた石組み及びその内部の状況について記述する。

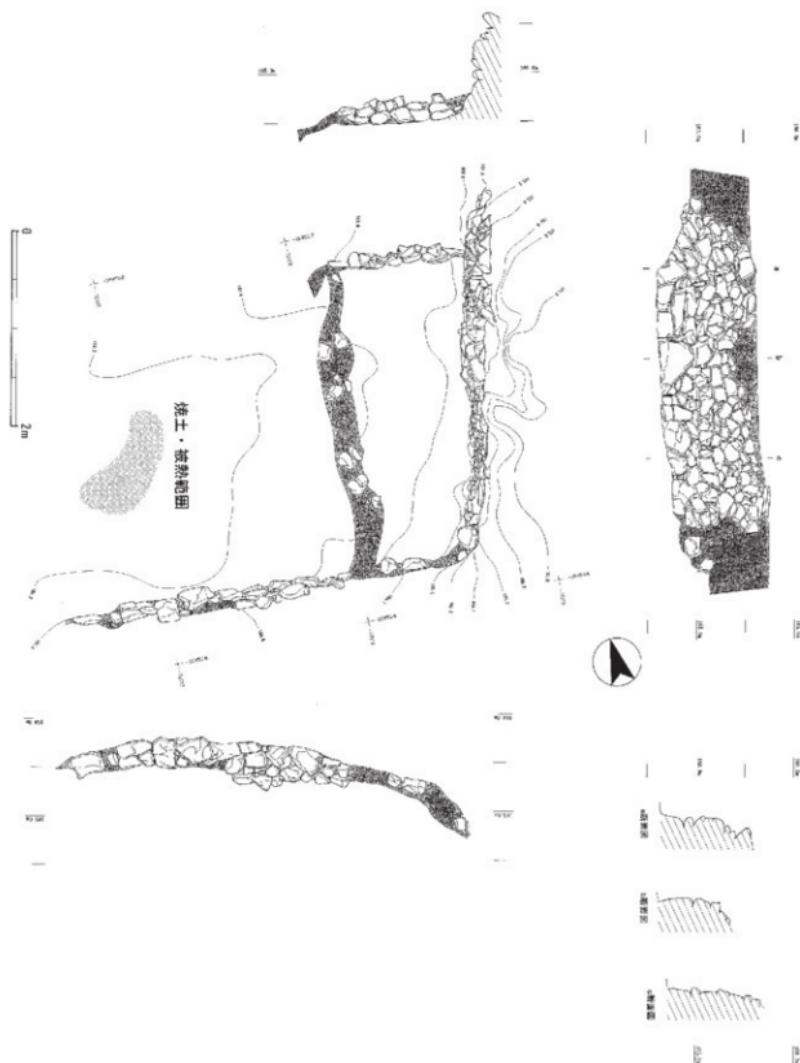
石組み遺構(第4図) 尾根の基部に平面形が「コ」字状に設けられた石組みで、西側に向かって開口する。調査前は、奥壁及び側壁から崩落した石多数が内部に堆積していたことから、造られた当時はもう少し高い位置まで石が積まれていたことがわかる。

奥壁中央部分は、調査前に該当部分に自生していた樹木の影響で、基底部から約0.7mから上の石が崩落していた。比較的残りが良い両端部分の状況から、当初基底部から1m程の所まで石が積まれていたと推定される。まず基底部に大きな石を並べて積み始めている。積まれている石は自然礫で、面取り等の加工はされていない。下から順番に石を積む際に、隙間に石を落とし込むいわゆる乱積みで造られている。

両袖部分は、奥壁に比べ残りは良くない状態であ



第3図 流谷遺跡調査区位置図 (1:2,000)



第4図 石組み遺構平面図・立面図・断面図 (1:50)

った。特に向かって左側の袖の石積みは奥壁から約1mしか確認できなかった。その延長部分については、周囲の状況から判断して、当初から石が積まれていなかった可能性もある。それに対し、右側袖については奥壁から約5mまで石が積まれていることが確認できた。最も残りの良い部分は、基底部から約0.5mの高さまで石が積まれ、上端もその部分は一定することから、当初の状態を保っていると思われる。袖部分についても、奥壁と同様の積み方で造られているものの、奥壁から約1mの部分については、両袖とも比較的小さな石のみが積まれており、基底部に大きな石は見当たらないという共通点が見いだせる。

石組みに囲まれた部分 石組みで囲まれた部分を精査したところ、奥壁から約0.6~1m離れた位置で部分的に石が並んだ状態で確認できた。これより奥壁側は一段高い壇状になっており、確認された石は当初この段の前面に積まれていた石積みの残骸の可能性がある。この西側は一段低い平坦面が形成されており、中央部で焼土が集中する部分が確認された。それ以外に遺構と判断できるものは確認できなかつた。

(木野本)

#### (2) 確認された遺物 (第5図)

石組み内の崩落石及び堆積土の除去中及び周辺部の検出作業中に、若干量の遺物の出土を確認したの

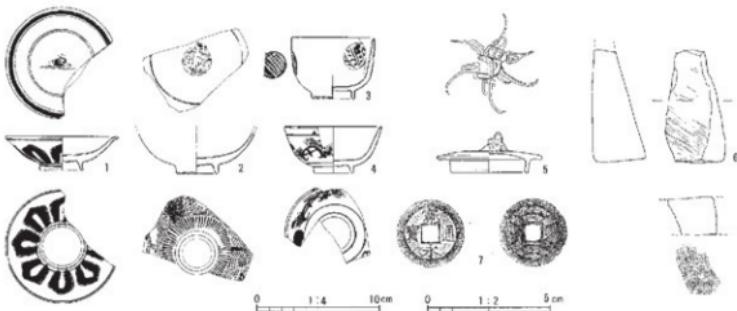
みである。

1~4は磁器である。1は端反碗の蓋で、口縁部は外反する。外面には刺菱形花弁文が染め付けによって描かれている。見込み中央部には文様が描かれている。瀬戸・美濃産の可能性が高いと思われる。2・4は丸碗である。2の外面には文様が銅板転写によって染め付けられている。4は小型で、腰部の屈曲がやや強い。外面の文様は赤・緑などの色絵である。3は筒丸碗であると思われる。高台はやや高く、口縁部は腰部からほぼ直線的に立ち上がり、外反しない。外面には円形の枠の中に草花文や格子文が染め付けによって描かれている。

5は陶器の蓋である。上部は扁平で、つまみが付く。つまみ部分は立体的に作られている。装飾性が高いものである。

6は砥石である。一部を欠損しているが、2面に使用痕が認められる。粘板岩ないしは泥岩質であると思われ、表面には使用に伴う擦痕が明瞭に残されている。小口部分には平行する明瞭な擦痕状の痕跡が認められるが、この痕跡は石を整形した際に残された工具痕と思われる。

7は寛永通宝である。背面には波文が鋳出されており、4文銭である。質や鋳上がりは良好で、文字や文様が明瞭に鋳出されている。「寶」の字体などからみて、1668年以降に鋳造された新寛永銭に属す



第5図 流谷遺跡出土遺物実測図・拓影 (1:4, 1:2)

るものと考えられる<sup>(1)</sup>。

以上の出土遺物のうち、3については筒形の器形のほか、高台が高い点や、口縁部が外反しない点などからみて、おそらく19世紀中頃の江戸時代末のものと考えられる。寛永通宝も江戸時代に属する遺物である。これらのように、若干ながら江戸時代にまで遡りうる遺物の存在が確認できる。

このほかの磁器については、器形や文様などからみて、ほとんどが19世紀中頃～末にかけてのものと思われる<sup>(2)</sup>。陶器の蓋に関しては時期は不明であるが、やはり19世紀中頃以降のものである可能性が高いであろう。

(木野本・石井)

### 3 小結

発掘調査では、石組みと若干の遺物が確認できた。出土遺物に寛永通宝があることから、石組みの造られた時期は江戸時代にまで遡れると考えられる。

流谷遺跡の石組みについて、調査成果だけで評価することは困難である。しかし、その構造は近くに所在する大西鎮守や周辺地域に存在する祠の石組みに類似することが指摘できる。また、石組みが周囲を見渡せる小高い所に位置し本駒集落の所在する西方向に開口すること、石組み内で焚火の痕跡や鉄が見つかったことから、本報告では流谷遺跡で確認された石組みも現存する祠と同様の信仰対象を祀る施設の一部である可能性が高いことを指摘するにとどめたい。

(木野本)

### 註

(1) 小川望2001「貨幣制度と鋳銭・銭貨」『図説 江戸考

古学研究事典』 柏書房

(2) 磁器の編年については、以下の文献を参考にした。

大橋康二1989『肥前陶磁』 考古学ライブラリー55

ニュー・サイエンス社、堀内秀樹1997「東京大学本

郷構内の遺跡における年代的考察」『東京大学構内遺

跡調査研究年報』1 東京大学埋蔵文化財調査室、

東京大学遺跡調査室（編）1990『東京大学本郷構内

の遺跡 医学部付属病院地点』東京大学遺跡調査室

発掘調査報告書3、瀬戸市1998『瀬戸市史』陶磁史

篇6、九州近世陶磁学会（編）2000『九州陶磁の編

年』

## IV 範囲確認調査

### 1 井良野新田遺跡

井良野新田遺跡は、大内山川左岸の標高175～182mの段丘上に位置する。地図は水田及び畠地で、JR紀勢線により東西に分断されている。過去に大内山村が実施した『大内山村史』編纂に係る分布調査の時点では、遺物の散布が確認された田畠一筆毎を遺跡として把握しており、井良野新田A～K遺跡の計11遺跡として紹介されている。しかし、周辺の地形や当センターが現地確認の際に実施した表面観察による遺物の散布状況から、一連の遺跡として把握するべきとの判断から、井良野新田遺跡と呼称している。前述の大内山村による分布調査では、室町時代から江戸時代にかけての遺跡であると推定されていた。しかし、現地確認の際に打製石器を表面採取

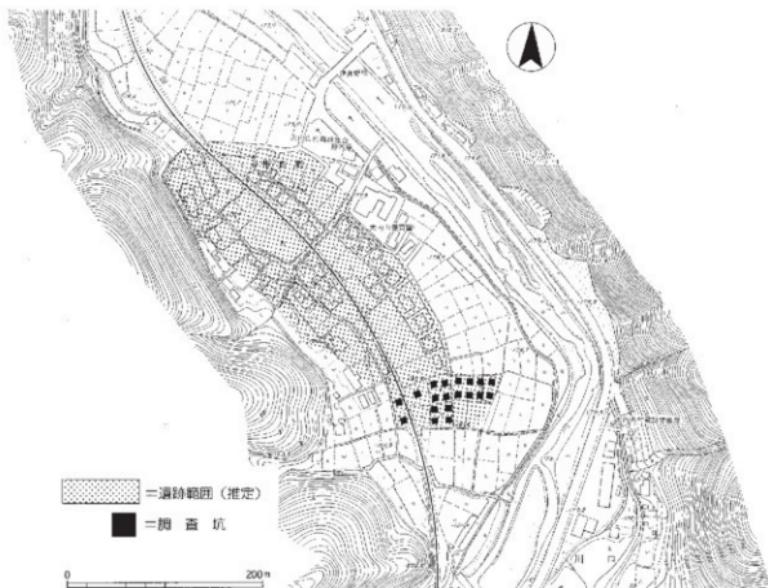
度会都大紀町大内山井良野新田

したことから、縄文時代に遡る遺跡の可能性も想定された。

調査は、平成19年9月26日～28日に、道路建設予定地内に調査坑19箇所(304m<sup>2</sup>)を設定し実施した。調査対象としたのは、『大内山村史』で井良野新田D・G・H・I・J・K遺跡とされている範囲及びその周辺部である。

調査の結果、いずれの調査坑でも構造は確認されなかった。遺物についても、大内山川寄りの調査坑の水田造成時の盛土内で、土師器鍋、陶磁器の破片を確認したのみであった。

遺跡名に「新田」とあるように、調査地一帯の田畠は江戸時代以降に耕地化されたものであり、その



第6図 井良野新田遺跡調査区位置図(1:5,000)

※旧 大内山村都市計画図を一部改編

際に遺構が削平された可能性が指摘できる。水田造成時の盛土内から遺物がまとめて出土したこと、それを裏付ける状況証拠のひとつである。あるいは、遺跡の中心は現在の集落部分にあり、調査対象地は遺跡の縁辺部に相当する可能性もある。

(木野本)

出土遺物 現地確認及び発掘調査の際に確認された遺物のうち実測可能なもの計9点について図化した。以下にその概略を記述する。

1は青磁碗の底部で、内外面共に灰オリーブ色の釉が施され、見込み部分には花文が描かれている。2は外面に染付けを施した磁器碗底部片。3は輪轉成形の陶器碗で、内外面ともに灰白色の釉が施される。4は丸碗の底部。5の陶器は、平底で平面形が梢円形状を呈する容器。6は擂鉢の底部片で、内面には櫛状工具による櫛目が明瞭に残る。7は南伊勢系土師器鍋。薄い器壁の内外面にハケメが施され、口縁端部は折り返し後上方に掻み上げられる。8は南伊勢系土師器鍋の茶釜形の小片。9の石鐵は、現地確認の際表探したもの。先端部及び片側の脚の一部を欠損する。風化が著しいが石材はサヌカイトである。

(木野本)

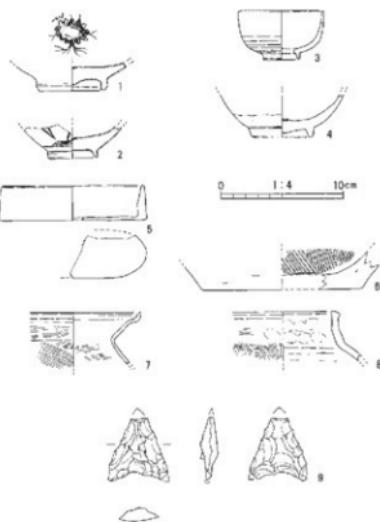
## 2 西ノ前遺跡

西ノ前遺跡は、大内山川右岸の標高186mの下位段丘上に立地する。南に隣接する一段高い段丘上には、後述する川口垣内遺跡が立地し、北に隣接する自然堤防上には杉の巨木が自生する。この遺跡も、『大内山村史』編纂に係る分布調査で確認され、室町時代後期から江戸時代にかけての遺物が表面採集されている。

平成19年10月4日に、道路建設予定地内の遺跡範

## 3 川口垣内遺跡

川口垣内遺跡は、大内山川右岸の標高190mの中位段丘上に立地する。遺跡の南に隣接する山上には、中世城館（大内山城跡）が築かれ、その麓を世界遺産に登録された熊野古道伊勢路のツヅラト峠へのルートが通過する。『大内山村史』編纂に係る分布調査では、中世に遡る遺物が広範囲に散布することが確認されている。前述の井良野新田遺跡と同様に、



第7図 井良野新田遺跡出土遺物実測図 (1:4、9は1:1)

度会郡大紀町大内山西ノ前

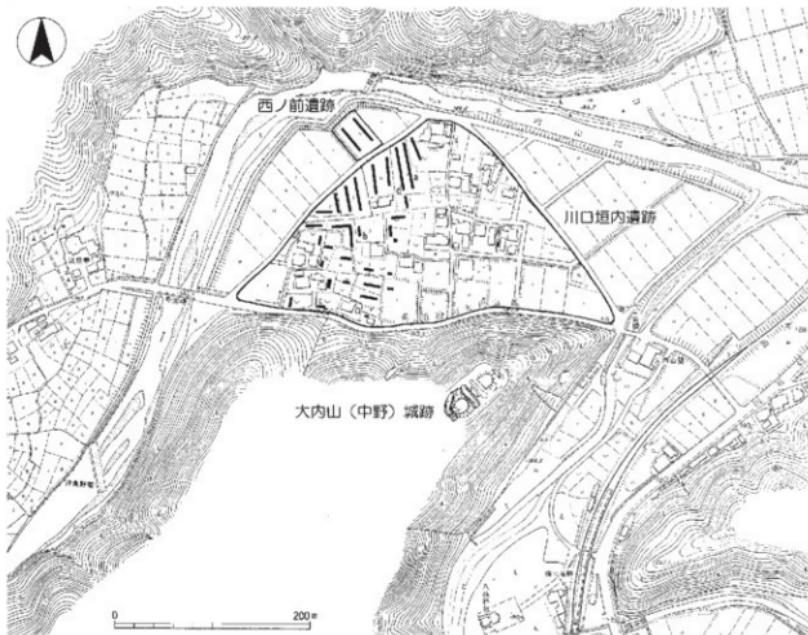
間とされる水田に幅2m・延長約30mの調査坑を2箇所設定し132m<sup>2</sup>を対象に調査を実施した。

調査の結果、いずれの調査坑でも大内山川の氾濫原と考えられる分厚い砂礫層の広がりが確認され、安定した地盤が存在しないことが判明し、遺構・遺物共に確認することはできなかった。分布調査で確認された土師器片は、隣接する川口垣内遺跡など他所からの流れ込みの可能性が高い。

(木野本)

度会郡大紀町大内山川口垣内

遺物の散布状況から川口垣内A遺跡から川口垣内E遺跡までの5地点に分かれて遺跡台帳に登録されてきているが、立地などからはそれが独立した遺跡とは考えにくい。また、今回の調査対象範囲内には川口垣内B遺跡・C遺跡・D遺跡が含まれる。そこで、これまでA～Eまで個別に登録されてきた遺跡をすべてあわせて、「川口垣内遺跡」として把握



第8図 西ノ前遺跡・川口塙内遺跡調査区位置図 (1:5,000)

したい。

事業予定地内に居住する方々の他所への転出・住居の解体撤去後まで調査着手不可能な部分が存在したため、範囲確認調査は都合2回に分けて実施した。

(木野本)

#### 平成19年度第1次調査

平成20年2月4日～6日に、水田や畠地となっている部分(4,500m<sup>2</sup>)を対象に幅2.5mの調査坑を18箇所設定し調査を実施した。いずれの地点でも明確な遺構は認められず、遺物の出土もきわめて少なく、調査坑(a)において土師器鍋小片や近代以降の磁器や瓦が少量確認されるなどにとどまった。調査坑(a)付近には、明治末年まで、付近の大字主であった乾氏の屋敷が存在しており、出土遺物はこれと関連するものと考えられる。

(伊藤)

#### 平成20年度第1次調査

平成20年度の第1次調査では、12箇所の調査坑を

設け、計208mにわたって調査を行った。調査では、調査坑(b)で近世の土坑とみられるものを検出した。この土坑は調査坑の壁面で確認したものであり、深さは40cmほどあるが、平面形状は不明である。埋土中からは、近世の陶器と土師質土器の破片が出土している。

ほかの調査坑では明確な遺構を確認することはできなかった。ただし、調査坑(c)では掘削中に表土や造成土の中から近世～近代にわたる陶器・磁器が多数出土している。

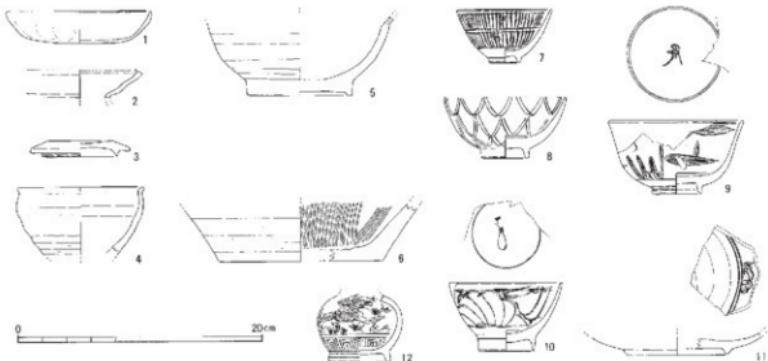
**出土遺物** 少量ながら、中世から近代にかけての遺物が出土している。

1は土師器の皿である。口径は12cmで器壁は薄く、底部から体部にいたる屈曲部はやや丸みを帯びる。口縁端部外面にはヨコナデが施されている。2は土師質土器の焙烙である。口縁部の小片で、口縁端部は上方へね上げられる。

3～6は陶器である。3は蓋物の蓋である。上面にはトチンの痕跡が残る。京・信楽系のものと考えられる。4は天目茶碗である。内面及び外面上半には鉄釉が施されている。5は片口である。片口部分は欠損している。見込みには重ね積みの痕跡が残る。瀬戸・美濃産と考えられる。6は擂鉢である。内外面には鉄釉が施されており、底部外面には糸切り痕がのこる。瀬戸産と考えられる。

7～12は磁器である。7は小壺である。8・9は丸碗である。8は外面に2本線による網目文が描かれている。9は胸胎染付である。外面には草花文と思われる文様が描かれており、見込み中央部にも記号状の文様が描かれている。瀬戸・美濃産と考えられる。10は広底碗である。高台はそれほど高くなく、底部と体部との器壁の厚みの差も小さい。瀬戸・美濃産と考えられる。11は皿である。内面には蛇ノ目釉剥ぎが認められる。12は小型の壺と思われ、外面には雲と思われる文様や雷文が描かれている。瀬戸・美濃産である可能性が高い。

以上の出土遺物のうち、1は平成19年度調査時に調査坑(d)から出土したものである。14世紀代のものと考えられる。2～12は平成20年度調査で出土したもので、2・4は調査坑(b)の壁面で検出された土坑の埋土から出土した。この2点は、おそらく17世紀後半頃のものと考えられる。3・5～12は調査坑(c)の表土中や造成土中から出土している。



第9図 川口垣内遺跡出土遺物実測図 (1:4)

これらは、19世紀中頃を中心とする時期のものと考えられる<sup>(1)</sup>。(石井)

## 註

- (1) 陶磁器の産地や編年、層年代観などについては以下の文献を参考にした。  
中野晴久1986『近世常滑焼における甕の編年の研究ノート』『常滑市民俗資料館研究紀要』Ⅱ 常滑市教育委員会、大橋康二1989『肥前陶磁』考古学ライブラリー55 ニュー・サイエンス社、堀内秀樹1997『東京大学本郷構内の遺跡における年代的考察』『東京大学構内遺跡調査研究年報』1 東京大学埋蔵文化財調査室、東京大学遺跡調査室(編)1990『東京大学本郷構内の遺跡 医学科付属病院地点』東京大学遺跡調査室発掘調査報告書3、大橋康二1994『古伊万里の文様－初期肥前磁器を中心に－』理工学社、瀬戸市1998『瀬戸市史』陶磁史篇6、九州近世陶磁学会(編)2000『九州陶磁の編年』、畠中英二2003『信楽焼の考古学的研究』サンライズ出版、(II)瀬戸市文化振興財團埋蔵文化財センター(編)2006『江戸時代のやきもの－生産と流通－』記念講演会・シンポジウム資料集

## V 結語

本書では、大紀町大内山地区に存在する遺跡の発掘調査の成果について報告を行った。調査の結果、遺存状況のよい遺構が確認されたのは流谷遺跡のみであったが、大内山地区で本格的な発掘調査が実施されたのは初めてのことであり、今回の調査は当該地域の歴史を考える上で、大きな意味を持つものと思われる。最後に今回の発掘調査の総括として、いくつかの注目すべき調査成果についてまとめておきたい。

石組み遺構と現存の祠　流谷遺跡で調査がなされた石組み遺構に似た遺構は、Ⅲ章でも指摘されているように、近隣に存在する大西鎮守でもみることができる。大西鎮守では石組み内にご神体として自然石が祀られ、それを覆う簡易な社が設けられている（巻頭図版2）。大西鎮守自体は近年に移設されたものであり、どこまで旧状を残しているのかは不明であるが、大内山地区では、他の現存する祠の中にも、この大西鎮守のように石組みの中にご神体となる自然石を安置するという形態を見るのがいくつかみられる。

流谷遺跡では、ご神体となった石や社が存在した痕跡は検出できなかったため、これらの祠と同一の性格を持つものかどうかという点については疑問が残る。しかしながら、石組みという点からみれば、全体の規模や使用されている石の大きさ、石の組み方、そして立地など、共通点は多い。

現存の石組みの中に自然石を安置する祠には、「山の神さん」、「愛宕さん」、「秋葉さん」などと呼ばれるものがあり、祀られている対象はいくつかあるようである<sup>(1)</sup>。しかしながら、これらは全体的にみれば山での活動に際しての安全を願うことを目的としている傾向があるように思われ<sup>(2)</sup>、山がちなこの地域に特徴的な信仰形態の一端を示すものとも考えられる。

これらの現存の石組みの中に自然石を安置する形態の祠については、現在でもそれが所在する集落での信仰対象となっているが、その起源についてはほとんど知られていない<sup>(3)</sup>。今回、流谷遺跡の

調査によって、これらの祠の成立時期が少なくとも江戸時代末にまで遡る可能性が高まることは、大内山地区やその近隣地区に存在する祠の起源をたどる上で、重要な知見であろう。

これまで、自然石を石組みで囲う形態の祠では、大内山地区の間引に所在する「愛宕さん」の棟札から、その成立が19世紀前半の江戸時代の文化・文政年間まで遡る可能性が考えられていた。また、山口家文書と呼ばれる文書の中に、天明元年（1781年）に川口村で宮の社の石垣を積んだという記録があるようである<sup>(4)</sup>。しかしながら、それらを裏付ける資料には乏しかった。今回の流谷遺跡の調査成果は、こうした祠が江戸時代から連続と続く地域的信仰に関係するものである可能性を高めるとともに、大内山地区における、山にまつわる生活の歴史的な深さを改めて認識できる資料となったものと思われる。

中世の大内山地区的様相　流谷遺跡以外の遺跡では明瞭な遺構は確認できなかつたものの、井良野新田遺跡と川口垣内遺跡で中世の遺物が確認されたことは注目されよう。分布調査によって、中世の遺物の散布は大内山地区内の複数の遺跡で確認されているが、調査によってそれらの散布地における遺構の有無を確かめることができた点は、大内山地区の中世遺跡の様相について考えていくための第一歩となつたといえる。

たとえば、これまで川口垣内遺跡では、大内山地区の中でも中世の遺物の散布密度が特に濃いことが指摘されてきた。しかしながら、発掘調査では明確な遺構は確認されなかつた。この点は、川口垣内遺跡の性格を考える上で参考となろう。

遺構がみつかなかつた原因としては、遺構がすべて耕作や整地などによって削平されていることも考えられるが、土層の堆積状況からみれば、大規模な削平は想定しにくい。それにも関わらず、大型遺構の痕跡も全く確認できなかつたことや、予想よりも中世の出土遺物が少なかつたことからみれば、削平によって遺構が失われた可能性は低いものと考えられる。

他に考えられる要因としては、まず、集落本体が大内山川のさらに上流部に存在しており、川口垣内遺跡に散布する遺物は上流から河川の作用によって運ばれたものである可能性があげられる。そしてもう一つ、川口垣内遺跡は単なる集落ではなかった可能性も考えられるのではないか。分布調査では室町時代末から江戸時代初期にかけての遺物が多く採集されているようであるが、すぐ南側の山の尾根上に存在する中野城跡と何らかの関係を持つ施設が存在した可能性や、交通上の要所としてそれに関わる施設が存在した可能性なども考えておく必要がある。

こうした造構の存在に関する情報の他にも、発掘調査による遺物の出土によって、各遺跡で人の活動が行われていた時期に関する情報をいくつか得ることができた点は重要といえよう。

川口垣内遺跡で出土した土師器皿は14世紀代、井良野新田遺跡で出土した青磁碗と土師器鍋は15世紀代のものと考えられる<sup>(5)</sup> <sup>(6)</sup>。村史編纂などに際してこれまでに行われた分布調査で多く確認されている遺物は、主として室町時代以降のものであるが、今回の発掘調査でもこうした時期の遺物が出土したことから、大内山地区では室町時代以降に人の活動が活発になっていたことが一段と明瞭になってきたといえる。

そして、1点のみではあるが青磁碗が出土していることも注目される。どのような経緯でこの地へもたらされたのかは不明であるが、この青磁碗が出土した井良野新田遺跡の性格を考える上でも重要な遺物であろう。

結語 以上、今回の大内山地区的埋蔵文化財発掘調査によって得られた成果のうち、主立ったものについて述べてきた。

ここで述べた点以外にも、縄文時代や江戸時代の遺物などからも様々な知見を得ることができる。また、今回の発掘調査は、これまで埋蔵文化財調査があまり行われていないこの地区において、今後行われる埋蔵文化財調査に対する一定の指針ともなりうるであろう。

これらの調査成果が、古くより人々が様々な営みを行ってきた大内山地区における歴史像を、より豊

かなものにするために寄与することができれば幸いである。

(石井)

## 註

- (1) 大内山村史編纂委員会2004『大内山村史』
- (2) 「山の神さん」はその名の通り山での活動の安全を願うもの。「愛宕さん」「秋葉さん」は火の神であるが、山火事の防止なども祈願されているようである。「鎮守」も村落の守り神ではあるが、一定の土地を守護する存在であると同時に森林との関係も深く、山に設けられている場合は、生活域としての山を含めた範囲の守護を担っていたものと思われよう。
- (3) 『大内山村史』でも、大内山地区内に存在しているこうした形態の祠のはとんどは成立年代が不詳となっている(大内山村史編纂委員会2004)。
- (4) 大内山村史編纂委員会2004
- (5) 青磁碗の編年と層年代観については以下の文献を参照した。  
横田賛次郎・森田勉1978「太宰府出土の輸入中国陶磁器について—型式分類と編年を中心として—」『九州歴史資料館研究論集』4 九州歴史資料館、上田秀夫1982「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』第2号 日本貿易陶磁研究会、原廣志1999「横地氏関連遺跡群と周辺遺跡の特徴について」『横地城跡－総合調査報告書－』菊川町教育委員会
- (6) 土師器鍋の編年と層年代観については以下の文献を参照した。  
伊藤裕作1992「南伊勢系土師器の展開と中世土器工人」『研究紀要』第1号 三重県埋蔵文化財センター

**凡例**

※No.は遺物図版・写真図版中の各遺物の番号と対応する。

※実測番号は実測図作成時に各遺物の実測図に付与した整理番号である。

※色調欄の「軸」は釉裏の色調、「胎」は胎上の色調を示す。磁器については胎土の色調のみ記している。

※胎土・釉薬などの色調は『新版 標準土色帖』による。釉薬の色調などは合致する色名が存在しない場合もあるが、その場合は最も近似すると思われる色名を記している。

※土器・陶器等の残存率は、基本的に口縁部の周を12分割し、そのうちの残存度を記している。口縁部を完全に欠失しているものについては、底部径と底部の残存率を記入している。

| No.              | 実測番号    | 種別    | 器種   | 口径・底径<br>(cm) | 器高<br>(cm) | 色調                               | 残存率   | 備考              |
|------------------|---------|-------|------|---------------|------------|----------------------------------|-------|-----------------|
| <b>【鹿谷遺跡】</b>    |         |       |      |               |            |                                  |       |                 |
| 1                | R001-01 | 磁器    | 蓋    | 8.8           | 2.8        | 10YR8/1灰白                        | 9/12  |                 |
| 2                | R001-04 | 磁器    | 丸碗?  | 3.1           | —          | 10YR8/1灰白                        | 12/12 |                 |
| 3                | R001-03 | 磁器    | 筒丸碗  | 6.8           | 5.0        | 10YR8/1灰白                        | 3/12  |                 |
| 4                | R001-02 | 磁器    | 丸碗   | 7.8           | 3.8        | 10YR8/1灰白                        | 3/12  | 色絵              |
| 5                | R002-01 | 陶器    | 蓋    | 6.0           | 3.3        | 軸：10YR6.4にぶい黄橙<br>胎：7.5YR6.4にぶい橙 | 10/12 | つまみ付            |
| 6                | R002-02 | 砾石    |      | 長さ9.1         | 4.4        |                                  | —     | 一部欠 196.4 g     |
| 7                | R002-03 | 銅錢    | 寛永通宝 | 2.8           |            |                                  |       | 完形 背面に波文・4.05 g |
| <b>【井良野新田遺跡】</b> |         |       |      |               |            |                                  |       |                 |
| 1                | R001-01 | 青磁    | 碗    | 6.0           | —          | 軸：5Y5/2灰オリーブ<br>胎：5Y7/1灰白        | 5/12  | 見込みに花文・高台内面施釉なし |
| 2                | R001-05 | 磁器    | 丸碗   | 4.0           | —          | 10YR7/1灰白                        | 5/12  |                 |
| 3                | R001-02 | 陶器    | 碗    | 7.0           | 4.0        | 軸：7.5Y7/2灰白<br>胎：7.5Y7/1灰白       | 3/12  |                 |
| 4                | R001-04 | 陶器    | 丸碗   | 5.0           | —          | 軸：10YR5.3にぶい黄橙<br>胎：2.5Y8/3淡黄    | 12/12 |                 |
| 5                | R001-09 | 陶器    | 不明   | —             | 2.9        | 軸：10Y7/1灰白<br>胎：5Y8/1灰白          | —     | 平面形が橢円形         |
| 6                | R001-03 | 陶器    | 擂鉢   | 13.0          | —          | 軸：5YR4/2灰褐色<br>胎：10YR7.3にぶい黄橙    | 3/12  |                 |
| 7                | R001-06 | 土師器   | 鍋    | —             | —          | 10YR6/2灰黃褐色                      | 1/12  | 南伊勢系            |
| 8                | R001-07 | 土師器   | 茶釜   | —             | —          | 10YR6.3にぶい黄橙                     | 1/12  | 南伊勢系            |
| 9                | R001-08 | 石鐵    |      | 長さ1.3         | 厚さ0.35     |                                  | —     | サヌカイト・0.41 g    |
| <b>【川口垣内遺跡】</b>  |         |       |      |               |            |                                  |       |                 |
| 1                | R001-01 | 土師器   | 皿    | 12.0          | 2.7        | 2.5Y8/2灰白                        | 2/12  |                 |
| 2                | R001-04 | 土師質土器 | 培塿   | —             | —          | 10YR7.3にぶい黄橙                     | —     | 近世土坑出土          |
| 3                | R001-03 | 陶器    | 蓋    | 6.2           |            | 軸・胎：2.5Y8/3淡黄                    | 11/12 |                 |
| 4                | R001-05 | 陶器    | 天日茶碗 | 10.4          | —          | 軸：10YR2/2黒褐色<br>胎：2.5Y8/3淡黄      | 2/12  | 近世土坑出土          |
| 5                | R001-02 | 陶器    | 片口   | 8.6           | —          | 軸：2.5Y6/3にぶい黄<br>胎：10YR8/3淡黄橙    | 11/12 |                 |
| 6                | R001-06 | 陶器    | 擂鉢   | 13.5          | —          | 軸：5YR4/4にぶい赤褐色<br>胎：2.5Y8/3淡黄    | 4/12  |                 |
| 7                | R002-02 | 磁器    | 小环   | 7.8           | 4.4        | 7.5Y8/1灰白                        | 5/12  |                 |
| 8                | R002-03 | 磁器    | 丸碗   | 10.0          | 5.0        | 5Y8/1灰白                          | 5/12  |                 |
| 9                | R002-06 | 陶器    | 碗    | 11.0          | 6.0        | N9/白                             | 1/12  | 陶胎染付            |
| 10               | R002-04 | 磁器    | 広東碗  | 9.2           | 5.5        | 5Y7/1灰白                          | 4/12  |                 |
| 11               | R002-01 | 磁器    | 皿    | 8.1           | —          | 5Y8/1灰白                          | 2/12  | 蛇ノ目釉剥ぎ          |
| 12               | R002-05 | 磁器    | 壺    | 4.8           | —          | N9/白                             | 12/12 |                 |

第3表 出土遺物一覧表

写 真 図 版



写真図版1 流谷遺跡調査前状況・作業風景



石組み調査前状況（西から）



調査区調査前状況（西から）



石組み奥壁調査前状況（西から）



3次元計測作業状況①（西から）



3次元計測作業状況②（北西から）

写真図版2 井良野新田遺跡



井良野新田遺跡遠景（南西から）



調査坑の状況（西から）

写真図版3 西ノ前遺跡



西ノ前遺跡（手前の水田）と川口垣内遺跡（後方）



調査坑掘削状況（東から）

写真図版4 川口壇内遺跡



調査坑掘削状況①（南から）



調査坑（b）近世土坑土層断面



土層堆積状況



調査坑掘削状況②（東から）

写真図版5 流谷遺跡・井良野新田遺跡出土遺物

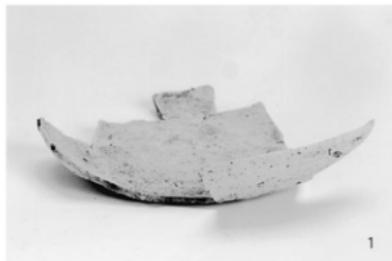


流谷遺跡出土遺物



井良野新田遺跡出土遺物

写真図版 6 川口垣内遺跡出土遺物



1



3



6



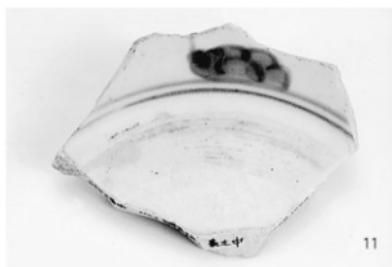
7



9



10



11



12

川口垣内遺跡出土遺物

## 報 告 書 抄 錄

---

三重県埋蔵文化財調査報告309

近畿自動車道尾鷲多気線（紀伊長島～紀勢大内山間）埋蔵文化財発掘調査報告

流 谷 遺 跡

2009(平成21)年3月

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター

印 刷 (有)山 文 印 刷

---